

令和5年度 山県市総合教育会議議事録

1 日時

令和5年10月2日(月) 午前10時00分～午前12時00分

2 場所

山県市役所3階 大会議室

3 出席者

市長 林 宏優

副市長 久保田 裕司

教育長 服部 和也

企画財政課長 丹羽 竜之

子育て支援課長 山田 佐知子

委員 堀 恵子

委員 大野 良輔

委員 千葉 純

委員 川田 八重子

事務局 学校教育課長 森川 勝介

生涯学習課長 藤根 勝

生涯学習課教育管理監 武藤 達也

生涯学習課課長補佐 毛利 佐知子

学校教育課主幹 鬼頭 都

学校教育課課長補佐 奥村 竜也

4 ■第1部

○講話：岐阜大学客員教授 早川三根夫氏

テーマ：5年先行く山県市の教育 ～山県市が全国のモデルをつくる～

<質疑応答>

■第2部 現状や今後について

○服部教育長 「こどもの成長を応援する教育立市構想」

・山県学園構想

・部活動について

・15：30以降の教育サービスの提供

○山県市こどもサポートセンター：原所長

・山県市こどもサポートセンター

<質疑応答>

5 会議の概要(別添のとおり)

※(山県市こどもサポートセンターは以下「こどもサポートセンター」という)

会議進行：学校教育課課長補佐	
1 市長あいさつ	
市長	<p>・教育は、最も大切なことだと認識した上で、近年は、子育てに力を入れている。</p> <p>・明石市の泉市長の名刺に5つの無料化を掲げていた。①医療費高校生まで②給食費中学校まで③保育料第2子以降④公共施設⑤おむつ1歳まで。山県市は、内容面においてそれ以上に優れていると捉える。特に、保育園から中学校まで給食費無償化に取り組んでいる。</p> <p>また、子どもたちが急激に減少していくなかで、一般的には学校の統合が全国的な流れとなっている。山県市は、子どもを中心に考え、現行の学校の体制を維持しながら、学校間連携を進めることで教育の質を担保することが本市の最重要課題である。</p>
2 第1部	
<p>講 話：岐阜大学客員教授 早川三根夫氏</p> <p>テーマ：5年先行く山県市の教育 ～山県市が全国のモデルをつくる～</p>	
早川氏	<p>・学校の統廃合について議論は、総論賛成・各論反対の意見が主流となる。丁寧な説明が必要となる。</p> <p>・山県市は、第三の道を「統廃合はしない、学校は現状維持」を選択した。これまでの学校の適正規模は行政（大人）にとっての適正規模であったと言える。一人一人の子どもにとっては、たくさんの友達と授業を受けたい子もいれば、少人数で学習したい子もいる。山県市は、所有するスクールバスを有効に活用し、他校との合同授業や合同部活など多様な学びを実現する。新たな仕組みに挑戦しようとしている。</p> <p>・今の子どもたちは、大人が思っている以上に複雑な人間関係の中で、生きている。ストレスは不安に変わり、それは、一人一人違って、いじめをする加害者になったり、引きこもりになったり、自傷行為によって、不安を解消している子もいる。バーンアウトすることもある。</p> <p>・団結力のある学級を作ろうとする先生の意識は、変わらないといけない。もっと、学級は緩やかで出入り自由な空間でなければいけない。</p> <p>・子どもたちは調和的に発達するとは限らず、凹凸しているのが普通。力のある先生は、自分の目標に近づけようと、子どもたちのトゲ</p>

早川氏	<p>(成長)をポキポキ折っている。その結果、今日は良い授業ができた と満足をする。これからは、トゲを折らない教育が必要だ。才能を開 花するきっかけづくりが必要だ。私も過去に子どもたちのトゲを折っ てしまったことを反省している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・後成遺伝学 (エピジェネティックス) では、2万以上のDNAに何か のきっかけで才能スイッチがONになるといわれている。 ・山口市では岐阜大学と連携し、心理テストやいじめアンケートを実 施することによって、子どもたちの内面の問題が見えてくる。 ・学校に居場所の持てない子どもたちは、早期発見、早期対応が必要 であり、安心して相談できる場所 (こどもサポートセンター) が必要 である。山口市は、この課題に向き合い予算をかけ居場所を確保して いる。 ・親の経済力より、子どもへの接しの方が子どもの成長には大切で ある。 ・子どもたちを大切に思っているサインは、大人同士が連携している こと。集合的有能感。思春期の頃は、親の言うことより親戚のおじさ んやおばさんの言うことを聞く。如何に思春期をうまく乗り越える か、学校と地域が協力し、子どもたちの潜在能力を開花させるかが大 切である。 ・コミュニケーションは、長さよりも声をかける回数が必要である。 ・児童生徒は、先生に認めてもらっているという気持ちが、自尊感情 に大きく影響する。しかし、先生の子どもを褒めているとする認識と 子どもを受け止め方にはギャップがあり、中学生になるほど、ギャッ プがひらく。先生は子どもたちを大いに褒めてほしい。 ・山口市は、既にたくさんのコンテンツがそろっている。しかし、乗 り越えるべき課題も多い。やりがいを持ち、これからも先進的な教育 を進めていくことを願う。 ・市民一人一人が、地域の教育者として山県の子どもたちのために出 来ることを考え、そして関わることの大切さに気づき、行動すること を期待し、話題提供とする。
3 質疑応答	
大野委員	<ul style="list-style-type: none"> ・学校が統合し減ると地域が衰退する。行政のバックアップが必要だ と思う。 ・これから5年間の課題は？
早川氏	<ul style="list-style-type: none"> ・教員の理解。試行的に行っている様々なコンテンツに対して、教員 がやって良かったと思うこと。

市長	<ul style="list-style-type: none"> ・小規模学校の維持について、市の財政面から見ると、学校が統合して教員数が減ると交付税は減ります。学校統合しないとする現方針であっても、市財政に大きな影響はない。
副市長	<ul style="list-style-type: none"> ・学校の統廃合（適正規模）を考えるときに、誰が主役なのか、それは子どもたちである。大人の都合ではいけない。これからはより多様な人材を受け入れることが大切である。子どもたちは、他人と比較されることを嫌う。実践されていると思うが、もっと子どもたちを褒めて伸ばしていただきたい。また、いじめは恥ずかしいことだと広めてほしい。
早川氏	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめの形態が見えにくくなっている。もしかしたら、いじめがあるかもしれないと常に気を配ることが、教師の役割だと思う。
<p>4 第2部 現状や今後について</p> <p>○服部教育長 「こどもの成長を応援する教育立市構想」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山県学園構想 ・部活動について ・15：30以降の教育サービスの提供 	
教育長	<ul style="list-style-type: none"> ・子育て支援は、日本一である。その上でこども支援や保護者支援を加えていくことが、山県の子どもの成長を応援する教育立市に繋がる。 ・新たな挑戦として、15：30からの教育サービス「アトリエ事業」を展開していく。 ・令和7年度からは、第3次教育ビジョンになる。 ・本人や保護者の承諾のもと、子どもたちの発達障害や不登校などの情報を早い段階から掴み、支援が必要な子には、子ども一人一人の成長に合わせた切れ目ない支援をしていくため、子ども未来データベースを作っていく。 ・こどもサポートセンターには、6つの機能を持たせていく。1階には、困り感を相談する場所（子育て支援課／福祉課／健康介護課）、元気な子どもたちが集まる場所。2階には、しんどくなったらいつでも誰でも立ち寄れる場所、困り感を相談する場所。3階には、先生たちが研修に集まる場所兼「不登校特例校分室＝学びの多様化学校」、勉強したい子が誰でも居られる場所。新たな物差しで一人一人の成長を保障する。 ・教育環境を整備していく。 ・1学年100人の時代がやってくる。山県市の部活動は、2025年を目途に地域クラブに移行していく。そのためには、部活動の意義

教育長	<p>(自由意思で所属・経済負担が小さい・それぞれの成長保障)を踏まえ、体制が整備できたところから移行していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山口市は、教育の集約化と重点化、予算の傾斜と集中を行っていきたい。
<p>5 第2部(続き)</p> <p>○山口市こどもサポートセンター：原所長</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山口市こどもサポートセンター 	
原所長	<ul style="list-style-type: none"> ・8/31こどもサポートセンターに通う子どもたちが、山口市役所の各施設を探検した。 ・教育長室での1コマ。教育長から「こどもサポートセンターを困った子、辛い子たちがいつでも来られる場所にしたいのだけど、どんな場所だったらいい？」と子どもたちに投げかけた。 ・子どもたちからは、「今のままでいい。自分のやりたいことがやれるように. . . 勉強がしたい。」 ・4月からこどもサポートセンターがプレオープンした。利用状況は、昨年度(4月～9月)14回、今年度(4月～9月)161回、昨年度の11.5倍利用している。 ・市内小中学校で2学期初日に登校しなかった不登校児童生徒は、21人。こどもサポートセンターなどに繋がっていない児童生徒の割合は全国平均より10%低くなっている。 ・生活相談員の配置について、現在4人体制。1日4時間で週平均3回。利用者の増加や子どものニーズに応じるため、来年度からは5人体制での対応を想定している。 ・子どもの抱える問題を複数の課と連携し、同一建物内で相談できる現在の体制は凄くありがたい。
6 質疑応答	
副市長	<ul style="list-style-type: none"> ・こどもサポートセンターのオープンだが、他課の補助金(こども家庭庁内示未確定のため)の関係で令和6年度スタートがずれ込む可能性がある。 ・学校の給食費無償化だが、経済支援より子ども支援を行うために実施した経緯がある。
堀委員	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちには、安心できる場所(環境)、信頼できる人が必要である。 ・先生のサポートが大切である。 ・システムのバックアップとお金が必要である。
大野委員	<ul style="list-style-type: none"> ・合同部活動など動きが複雑だが、子どもの現状をつかめているか？

原所長	・トラブルは 0 ではないが、ジョイントスタディを例にすると、今年は 2 年目。いわ桜と美山小の交流では、教員が、両校の生徒を見ることへの意識の芽生えができた。
千葉委員	・ 2 学期初日に登校できなかった児童生徒に対し、こどもサポートセンターは繋がっているか？
原所長	・ 毎月各学校から報告があり、繋がっている。主任児童生徒相談員が学校へ出向いて情報収集することもあり、一応全ての児童生徒を把握できていると認識している。
千葉委員	・ これからも引き続き、きめ細やかな相談を続けてほしい。
子育て支援課長	・ こどもサポートセンターが近くにきたことで難しい問題やヤングケアラー、見守りネットワークができた。ステップアップにつながった。
川田委員	・ コミュニケーション不足の子どもも対応していただきありがたい。 ・ コロナ感染症で不登校の子はいますか？
原所長	・ コロナにかかり、1 ヶ月ほど他の子と登校が遅れた子がいた。
企画財政課長	・ 行政の教育に対する関わり方が、大きく変わっていく印象を受けた。（例：15：30以降の教育サービス） ・ お金が必要だと思うが、どこにお金をかけるかは市全体で考えていく。
副市長	・ 理想を掲げながら、理想を目指す。 ・ 子どもたちとの関わりは、一番重要で、子どもたちを守っていただきたい。

午前12時00分 閉会